

ポイント14 言葉は人の心を養い育てる

親と子の楽しい思い出をつくらう

幼稚園で、友達とうまくや
っていけない子、先生のお
話に耳を傾けられない子と

いうのは、親に会って話合ってみますと、ほとんどが口を合せたように「独りでよく遊んで手のかからない良い子だった」と言っています。

いかに独りでよく遊べるからと言って、放っておいたのでは、“人”は“人間”になれません。人の“間”に置かれて、顔を合せ言葉を交して初めて“人間”になれるのです。それまでは、動物的な“人”に過ぎないのであって、万物の霊長たる“人間”ではありません。

過保護はいけませんが、人間の子は親の保護が絶対に必要なのです。親の口から発せられる言葉を耳にし、それをまねることによって言葉を覚え、人間の心を養い育てているのです。

昔は、赤ちゃんの周囲にはいつも人が大勢集り、声を掛けたものです。だから、皆、人間らしい人間になることが出来ました。ところが今は、核家族と呼ばれる小家族のため、赤ちゃんは人間の声を聞く

機会が少なくなりました。

それだけに、昔よりも一層親の責任が重くなったわけです。独りで遊んでいるから良い、と考えないで、出来る限り子供の相手になるべきです。親としてそれは何よりも大事な仕事であって、楽しい仕事のはずです。親子のこうした営みは、子供が成人しても心温まる思い出となり、また親としても楽しい思い出となります。

コラム

部首 月

半月の象形。太陽に比べ欠けている時の方が多いのが特徴。

【朝】 草と舟月との形声字。草の間に太陽が見える“あさ”を表した。

【有】 ナ(手)と肉月の会意形声字。右手に肉を持つ形で“もつ”が本義。「所有者」。転じて“ある”こと。